

中国朝鮮族の移動と朝鮮族コミュニティの形成に関する研究

李, 勁松
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/2198502>

出版情報 : 韓国研究センター年報. 9, pp.69-73, 2009-03-31. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

中国朝鮮族の移動と朝鮮族コミュニティの形成に関する研究

李勁松 (九州大学大学院比較社会文化学府)

目 次

序 章	1
第一部 中国朝鮮族の形成とその展開	
第一章 朝鮮人の中国延辺地域への移住と「中国朝鮮族」の形成	18
序	
Ⅰ 建国前の移住と朝鮮人地域社会の形成	
Ⅱ 定住化と中国社会への参与—「朝鮮人」から「中国朝鮮族」へ	
Ⅲ 中国社会への適応のプロセス	
小 結	
第二章 延辺朝鮮族の中国社会への適応と民族文化の動態	41
序	
Ⅰ 先行研究と朝鮮族民族文化の特徴	
Ⅱ 公的場面で提示される延辺朝鮮族のイメージ	
Ⅲ 民族関係から見る延辺朝鮮族の自文化意識	
Ⅳ 近年における民族文化・歴史の再構築	
小 結	
第三章 国境地域延辺における国境を渡る移動と経済活動	63
序	
Ⅰ 延辺朝鮮族自治州と朝鮮北境地域との交流の多様化	
Ⅱ 国境を跨る生活圏の再生—古城里村	
Ⅲ 国境貿易から見た延辺朝鮮族と北朝鮮人とのネットワーク	
Ⅳ 国境を越えるネットワークの形成と延辺朝鮮族の民族意識	
小 結	
第二部 中国朝鮮族の再移動と移住先におけるコミュニティの形成	
第四章 中国国内における朝鮮族の都市への移住と適応	83
—北京市における朝鮮族コミュニティの形成を中心に—	
序	
Ⅰ 先行研究と現地調査概要	
Ⅱ 北京市における朝鮮族生活基盤の生成	
Ⅲ 北京市における朝鮮族における朝鮮語による生活情報誌の登場	
Ⅳ 朝鮮族の「定住」の進展と「三江朝鮮語学校」の誕生	
Ⅴ 情報誌・三江朝鮮語学校の誕生から見る北京朝鮮族コミュニティの特質	
小 結	

第五章 韓国における中国朝鮮族出稼ぎ者の生活とコミュニティの形成 ……………	106
序	
Ⅰ 韓国への中国朝鮮族の移動と生活形態	
Ⅱ ソウル市における中国朝鮮族の生活拠点「タウン」の展開と飲食業の発展	
Ⅲ 国際結婚とコミュニティの拡大	
Ⅳ 中国朝鮮族出稼ぎ者と韓国社会の反応	
Ⅴ 韓国の国籍取得について	
小結	
第六章 日本における中国朝鮮族の生活基盤作りとネットワークの形成 ……………	134
序	
Ⅰ 中国朝鮮族の日本への移動とその生活	
Ⅱ 飲食業・民族団体の形成にみる朝鮮族コミュニティの萌芽	
Ⅲ 日本社会への適応と自己の新たな位置づけ	
小結	
終章 ……………	166
参考文献 ……………	173
謝辞 ……………	189

1. 研究目的と分析視点

本論文は、中国朝鮮族（以下朝鮮族と略す）の近年の移動と、移動先での朝鮮族コミュニティの形成およびその特徴について分析し、朝鮮族が各地域においてどのような生き方をしてきたのかを、比較しつつ検討したものである。

朝鮮族とは、1860年代朝鮮半島から中国への移動によって形成された民族集団である。中国東北地域で百年余りにわたって生活してきた彼らは、1980年代以降中国政府の改革開放政策に伴い、国内の沿海都市や海外へと向かって再び移動を行っている。朝鮮族の移動に関しては中国の少数民族の中で最も高い移動率を示しており、朝鮮族総人口約三分の一が移動していると言われている。またその移動範囲も国内のみならず韓国、日本を始めとして世界中の広い範囲に渡っている。近年における朝鮮族の移動は「第二大移動」とも言われているが、当然移動先における朝鮮族のホスト社会への適応や同化がどのように行われているかという問題を提起する。本論文では、現代における朝鮮族の大規模な移動とそれに伴う朝鮮族社会の変化を解明する一助として、さまざまな移動先における朝鮮族の適応状況を明らかにすることを目指している。その際、移動先における「朝鮮族コミュニティ」の形成を中心に考察する¹⁾。

しかしながら、近年の移動による朝鮮族社会の変化を明らかにするためには、まず朝鮮族とはいかなる民族集団で、どのような民族意識を持っているのかを明らかにする必要がある。そのため本論文では、新中国建国以前の移動と1980年代以降の移動と二つの時期にわけて、前半の第一部では、延辺朝鮮族自治州を中心に、1860年代の朝鮮半島からの移動から近年の大移動以前までの時期を扱い、後半の第二部においては1980年代以降の新たな

1) コミュニティに関しては、地域社会、共同社会、共同体などさまざまな解釈がある。本論文では朝鮮族の移動と各地でエスニシティという共同性に基づいて形成されたコミュニティに焦点を当てるため、地域性のある程度考慮にいれつつも、具体的な地域に縛られない概念としてネットワーク・コミュニティの形成も視野にいれ、両者を包括的に朝鮮族コミュニティと呼ぶ。なお、本論文では朝鮮族コミュニティをホスト社会との関係の中で絶え間ない変容過程にあるものとして動態的に捉える。

移動と移動先におけるコミュニティの問題について検討する。

分析の視点においては、一部では歴史学的視点と朝鮮族側からの視点にたつて、各時代の社会変動に対して朝鮮族がいかなる判断を下し、いかなる行動をとってきたかを、主に個人的な側面に焦点を当てて、その選択を分析し、二部では現地調査で得られた朝鮮族の国内、国外移動に関する個別的な事例を中心に分析を行った。

2. 各章の概要

本論文は序章、本文（二部、6章）、終章で構成される。

序章では、研究目的と研究意義、理論的枠組、調査地の選定、調査方法について記述した。

第一部（第一章～第三章）では、延辺朝鮮族を中心に、19世紀後半より始まる朝鮮半島から中国への移住過程およびいかに延辺地域に定着し、その過程においてどのような社会的・政治的状況に置かれて、どのように中国への帰属意識を形成するに至ったかを、①新中国において少数民族として位置づけられたこと、②漢族との関係、③延辺朝鮮族のあり方に影響を与えてきた「母国」北朝鮮の存在、という三つの視点から考察した。

第一章では、本研究の前提となる「中国朝鮮族」の形成と中国への帰属意識の問題について述べている。まず19世紀後半からの朝鮮半島から中国への移住について概略紹介する。次いで1949年の新中国誕生後、中国東北地域に留まった彼らは、朝鮮族として中国少数民族の一つに認定されたが、彼らの間に中国への帰属意識がどのように生まれたかについて述べている。すなわち朝鮮族は辺境地域の開発や、その後の抗日戦争・中国解放戦争、さらには朝鮮戦争での貢献によって、「労働模範」、「革命戦士」などと顕彰されることを誇り高く感じており、朝鮮族側から中国社会への積極的な参加が多く見られるようになっている。また、自分たちの歴史を朝鮮半島とは切り離し、移住以後にその歴史の出発点を求めている。これらは中国の民族政策と関係するものではあるが、これらを通じて中国への帰属意識が次第に強固なものとなっていったことを論じた。

第二章では、延辺地域に漢族が多数移住し、漢族の文化や習慣が浸透する中で、朝鮮族が自らの文化をいかに維持しようとしてきたかについて論じた。かつて延辺地域は漢族が少なく、漢族との交流も少なく、朝鮮族の文化が維持されていたが、近年は人口が逆転しつつある。そのなかで朝鮮族の文化に関する研究では従来漢文化による影響が強調されるのに対し、本章では言語、食生活、住居などにおいては伝統的なものが基本的に守られてきたこと、日本の支配時代には朝鮮人を漢人の上に位置させる政策が採られたが、そのような優越意識が解放後も残存し、彼らの間に漢族との文化的差異が強く意識されていることなどを明らかにした。朝鮮族の歴史は中国への移住期を出発点とするが、文化に関しては朝鮮半島における「伝統的文化」との繋がりが常に強調されていることも注意されることである。

第三章では、延辺朝鮮族と北朝鮮との国境を越えて形成されるネットワークを通して、延辺朝鮮族の民族意識について考察した。延辺地域と北朝鮮間の国境貿易（密貿易を含む）や近年における脱北者の受け入れなど、両地域の人々は地縁・血縁的な要因により、建国前からの国境を越えた生活圏を部分的にとはいえ、現在に至るまで維持している。その背景には両地域における共通の生活需要と同民族としての連帯意識が大きく働いていることを明らかにした。

以上、第一部において、すでに長期間にわたり中国東北地方に居住していたため、朝鮮族は新中国の成立後、自らの意思により中国への帰属意思を積極的に表明したこと、しかし文化の面においては朝鮮半島にルーツを求め続けているという、複雑な状況にあることを論じた。

第二部（第四章～第六章）では、改革開放政策後の朝鮮族の新たな移動先である北京・ソウル・東京に焦点を当てて、各地での彼らの生活基盤作りと朝鮮族コミュニティの形成について考察した。

第四章では、北京における朝鮮族コミュニティの形成について論じた。改革開放政策後中国国内における移動は原則的に自由となった。しかし戸籍制度は旧来のままであったため、北京に来た朝鮮族の大半は北京戸籍を持たず様々な場面で不利な状態に置かれた。そのため彼らは「高麗村」「望京」と呼ばれる朝鮮族集居地域を形成し、飲食業などを中心に生活していた。しかし、1990年代から韓国企業の中国への進出に伴い、これと関わる形で朝鮮族の経済活動も多様化し、従来の集居的コミュニティは次第に消滅していった。一方コミュニティの弱体化を補うように発達してきたのが朝鮮語による様々な「情報誌」であり、これにより仕事・情報・サービスを通じたネットワークの強化が進められている。このような状況もあり、北京において朝鮮族は韓国との経済関係の深さから、漢族中心の社会環境の中で朝鮮族として韓国文化との近似性を前面に出して自分たちの存在を強調している。他方、民族私立学校を設立・運営するなど、北京での「定着」への志向と地域社会への融合を図る側面も確認できた。

第五章では、ソウルにおける朝鮮族コミュニティを、ソウル市内の「朝鮮族タウン」をもとに考察した。朝鮮族移住者の大半は出稼ぎ労働を目的としたもので、不法滞在者であった。そうした中で、朝鮮族は相互扶助関係を形成しながら複数のタウン（コミュニティ）を形成していった。当初朝鮮族は韓国人と同じ民族であるという意識をもってしたが、次第に韓国人からは中国国籍を持つ異文化の存在として認知されるようになり、現在、同民族としての一体感は薄く、むしろその文化的差異が強調されている。彼らが形成した朝鮮族タウンも漢族の増加や飲食店の中華料理のメニュー、漢字を多く使用するなど朝鮮族タウンというより中国色の強いチャイナタウンへと変質している。すなわち彼らは、韓国人からその異質性を強く指摘されることにより、「同民族」ではなく「韓国人」とは異なる「中国朝鮮族」という民族として韓国社会で生活せざるを得なかったのである。そうした中で、むしろ中国との関係が朝鮮族の中に強く認識されている。この点は北京の朝鮮族とは全く逆の様相を呈している。

第六章では、東京における朝鮮族の関係について取り上げた。日本に来た朝鮮族は北京やソウルと異なり、多くが留学生であり、高学歴者が中心となっている。推定3、4万人余と言われる在日朝鮮族の中には、日本での就職や帰化などによって定住化するものが多く見られる。大久保などには新たなコリアンタウンの形成がみられるものの、朝鮮族は必ずしも集団的に居住してはいない。しかしながら朝鮮族中心の民族団体の設立や活動が盛んでおり、組織化がみられる。その一方で、日本内で生活する上で、とりわけ子供の世代において言語や生活スタイルなどの面で一部同化が進行しており、それと連動して「国籍」や「民族」に固執しない新しい民族意識のあり方が見られた。また、民族団体活動を通して、彼らは「在日朝鮮族」と名乗り、中国語、韓国語（朝鮮語）、日本語という東アジア主要言語の三カ国語を話す自分たちを東アジアにおいてほかの民族に代替できない役割を担う重要な存在として位置づけており、自民族に対する新たな価値観が醸成されつつある状況である。この点は北京やソウルに居住する朝鮮族とはかなりの違いが生じている。

以上第二部では、延滞を離れ、北京、ソウル、東京という異なった社会環境に居住する朝鮮族が、どのようなコミュニティを形成し生活をしているかについて明らかにした。彼らは異なった地域、国において様々なコミュニティを形成したが、その際、移住者の経済状況、学歴などがコミュニティの形成やありかた一定の影響を与えていること、また1990年代の韓国との関係が従来の朝鮮族コミュニティに大きな変化を与えていることが明らかになっている。

19世紀後半の朝鮮半島から中国東北地方への人口移動はより良き生活を新天地にもとめようとしたものであるが、中国の改革開放政策にもなって生じた地域間の経済格差は朝鮮族のあらたな移動を促した。もちろんこれは朝鮮族特有の現象ではなく中国内においても多く見られた現象で、経済的に発展した地域に地方から多くの人々が移住している。彼らは異なった社会環境の中で生きていく一つ的手段として同一地域、あるいは同一民族によるコミュニティを形成した。この中で朝鮮族が他集団と異なる様相を呈するようになったのは、1990年代の中韓国交樹立による。これにより彼らの生活、コミュニティに大きな変化が起きた。北京の多くの朝鮮族は初期のタウンから出て自らと韓国人との関わりを強める形で生活をするようになった。他方、韓国へ出稼ぎに行った多くの朝鮮族は逆に韓国人と自らとの相違を強く意識させられ、その結果として独特の、すなわち中国的要素を強くしたコミュニティを作り上げている。また、東京を中心にして居住している朝鮮族は留学生が多く、もともと高学歴の者が多い。彼らはタウンのようなものは形成してはいないが、民族団体の設立など、朝鮮族のネットワークを形成し、朝鮮族としての意識の持続をはかろうとしている。その意味で北京やソウルの朝鮮族とは異なった生活形態を持っている。

本論文では朝鮮族の各地域におけるコミュニティの形成とその変化を主としてフィールド調査をもとに明らかにした。朝鮮族は異なった社会環境の中で様々な対応をしつつ生活してきたが、中国の一層の経済発展、あるいは延辺地域における新たな経済開発で彼らの生活も大きく変容しようとしている。その意味で本研究はこれまでの朝鮮族社会の重要な側面を明らかにしたといえる。